

1
遠くから来る

余言覃

今、大阪に住んでいる。私は時々自分がこの都市での生きる位置を考える。

林立するビル、交差する街と高架橋、絶えずその間を行き交う群衆と車の流れはこの都市の姿である。日が昇る前に鳥の鳴き声や運転する機械の音の中で、都市は既に目覚める。人々は素早く交差点と地下鉄の乗り換え駅を通り抜け、朝から日が沈むまで、長い渡り廊下と地下通路、まるで果てしない潮のように呼吸が水浸しになり、足音だけが残される。こんな都市に到着するために毎日無数の人は遠くから来ている。彼らは都市へ夢を追いに来る。但し、夢は生命に近づけるために真実になるのだが、都市の夢は鉄筋の下に、真実と明らかさは要らない。

小さい頃、私は祖父母と一緒に過ごしていた。都市へ行ったことがなかった先人のように、祖父母は日に向け、心を土地に奉る。鶏

の鳴き声とともに、朝焼けの時に出かける。
数畝の田畑と菜園があり、労働で収穫がある。
祖父はよく私を連れて湖に棹を差し、籠を作
って漁をし、水面を飛んだ蜻蛉を見る。木の
下へ涼みに行き、祖母に読書や書字を教えら
れ、湖上で揺れた蓮を眺める。生命が大地に
近づけるので真実になり、私はそのような生
命の姿を感じた。そして、世界全体にも心か
ら撞れ、夢が発生した。だが、都市の人達は
日を楽しむことができない。だからこそ夜の
ネオンを創造するのではないか。
かつて二車線の間を通り抜けていて、突然
足どりを移すのができなくなつた。人の流れ
が依然とあり、街灯が星々みたいで、行つた
り来たりする車の流れがヘッドライトをつけ
て輝いて来る。その瞬間、さながら私が一人
の観客もいない舞台に立っているようで、天
の明月しか最大で唯一の舞台照明にならない。
この都市には私がいなくても何も変わらない
ということを急に意識した。都市建築の建設

者といわず、都市清潔の掃除者といわず、都市発展の指導者といわず、あらゆる都市にはその一人の誰かがいなくても何も変わらない。都市にはある人に専属する位置がない。彼は機械で、分業が明確で、偶に部品的位置をあげたまま人々が適応することを待つ。

つまり、私は古代ローマ都市を描く本の中で、エヌ-ワイの賑やかさを放送するビデオの中で、上海を建設する未来計画の中で、もともと早くこの大阪という都市を熟知した。組み合わせの元素さえ変えれば、新しい都市ができるのだ。しかし、子供の頃世界を探求する切願を忘れたことがない。現代文明を表す都市が祖父母の小さな土地よりきつと遙かに素晴らしいものだと思っていた。従って、自分の都市での位置を見つけられぬ。幾つもの都市に到着しても、子供の頃の夢は、その天の明月らしく昔のように清らかでもあんなに遠い。私は心を遠い処に残し、遠くから来て、無数の都市で転々と流れる。

指先がキーボードを叩き、パパッと、まるで麦の穂がコンバインの前に倒れた音のようである。私は遠方まで帰れるか。

祖父母も必ず死亡し、湖も終に干上がる。私も最終的に見えぬマスクをつけながら都市を歩く者になり、立身をして家庭を持って、子を育てて暮らそうか。近代化が都市にいかなる顔を与えられ、たとえ鳥が囀り花が香り、谷川の水がさらさらと流れても、帰れないところは自然に寄り添い、喜んで平淡に慣れ、毎日日が昇るとともに仕事に出かけ、日が暮れるとともに休息する普遍価値である。

人間は自然環境を変えて文化を創造した。これは人間が生きる法則で、善し悪しを断言できない。私は工業がどのように発展していきにも、都市がどのように拡張するにもかわらず、いつの夜の都市であって、灯火の明かりを除き、明らかな月が変わらないことをただ願う。深夜の街に沿って家に帰る時、見上げて遠方を懐しく思うことを忘れない。